

高齢者に優しいまちづくり～現場・自治体から学ぶ～
『奈良県天川村（地方部）の取り組み』

奈良県天川村 山端 聰

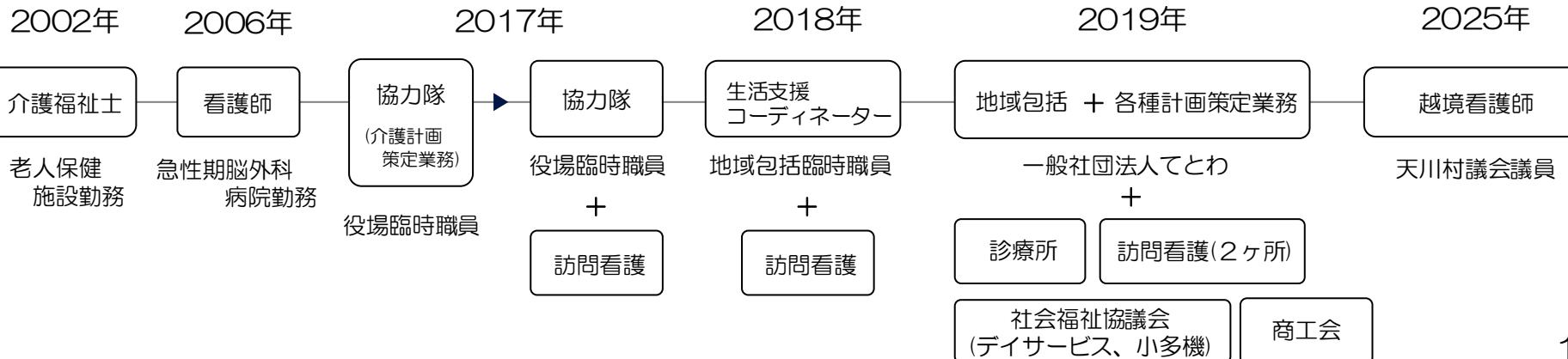
2026年2月7日

山端 聰 (yamahata satoshi)



- 1978年生まれ（47歳）
- 奈良県大和高田市出身
- 妻、子3人、保護犬3匹（#ひじきとつるり）
- 介護福祉士/看護師
- 改良めだかの飼育（#メダカのさとし）、稻作、畑作→観察とケアが大事！
- 日本プライマリ・ケア連合学会/わい和いNARA在宅サポート研究会
奈良県コミュニティナース
- 最近の関心事：
 - 地域看護教育や人材育成「現場で使える知識」や「地域での看護のあり方」
 - 従来型公教育の変革「天川村ならではの公教育のあり方」
 - 天川村ウェルビーイング・ヘルスツーリズムの開発

人材/越境・役割の重なり（AFCの実装には、分野を越えて動ける人材が不可欠）



天川村の概要



- ・総人口：約1200人 高齢化率：約51% 世帯数：約640世帯
- ・森林面積：奈良県全体の70%、天川村の95%以上が森林
- ・診療所1カ所 介護事業所：小多機、訪問看護・介護・リハビリ、デイサービス、介護タクシー 等
- ・教育：村立小中一貫校（天川小中学校） 保幼一体化（天川村保育園、天川村幼稚園）
- ・観光：年間100万人（令和6年度宿泊者数延90万人） 標高600～800m 最高地点1,915m（八経ヶ岳）
1300年の歴史がある山岳信仰の聖地 季節ごとの閑散が目立つ 中小企業を中心の家族経営（副業的な働き方）
- ・主な観光資源：大峯山、天河大辨財天社、洞川温泉、みたらし渓谷、清流、星空
- ・人間関係：血縁関係・地縁関係が深く距離感が近い。地域全体が顔馴染みの関係性。学校から診療所まで把握。

天川村の観光・自然・四季

春



【温泉】

吉野杉・桧・松・楓などをふんだんに使った建物は、木の香りいっぱいの秘湯ならではの落ち着いた空間。温泉はしっとりつるつるの俗にいう「美人の湯」の成分が多く、身体が芯から温まります。



【釣り】

大峯山脈から流れ出す清流の音や鳥の声、爽やかな風を感じながらの渓流釣りが楽しめます。アマゴ（アメノウオ）・アユが放流され、冬場はニジマス釣りが楽しめます。

秋



【登山】

山上ヶ岳・稻村ヶ岳・弥山・八経ヶ岳などの大峯山脈の山々は、古くより修験道の地として知られ、各地から登山者や修行者が訪れます。世界遺産の一部を構成しており、春は色とりどりの花、夏は新緑、秋は紅葉、冬は雪景色と自然を満喫できます。



【ハイキング】

住居地からすぐ近くにみたらい遊歩道や洞川自然研究路といった散策路が整備されており、思い立ったら気軽にリフレッシュしたり景色を楽しんだり、自然と触れ合うことができます。

夏



【行者祭り】

行者祭は、大峯山の開祖である役行者が島流しにされ、のちに晴れて無罪となり大峯山に戻ったとき、洞川の人たちが熱狂的に出迎えた様子を鬼踊りであらわした祭です。



【バーベキュー】

天川村には洞川エリアから西部エリアまで様々なキャンプ場・バーベキュー場が点在しています。川遊びを目的に天川村にお越しになる方にもキャンプ場・バーベキュー場の利用をお薦めしています。

冬



【星空】

村内どこでも満天の星空が楽しめるビュースポットです。ですが、天候によって満天の星が見られる日は限られています。そんな貴重な星空が見られるのも、毎日夜空を見上げるからこそ。たまたま空を見上げた時に広がる星空は、日常の思わず褒美です。

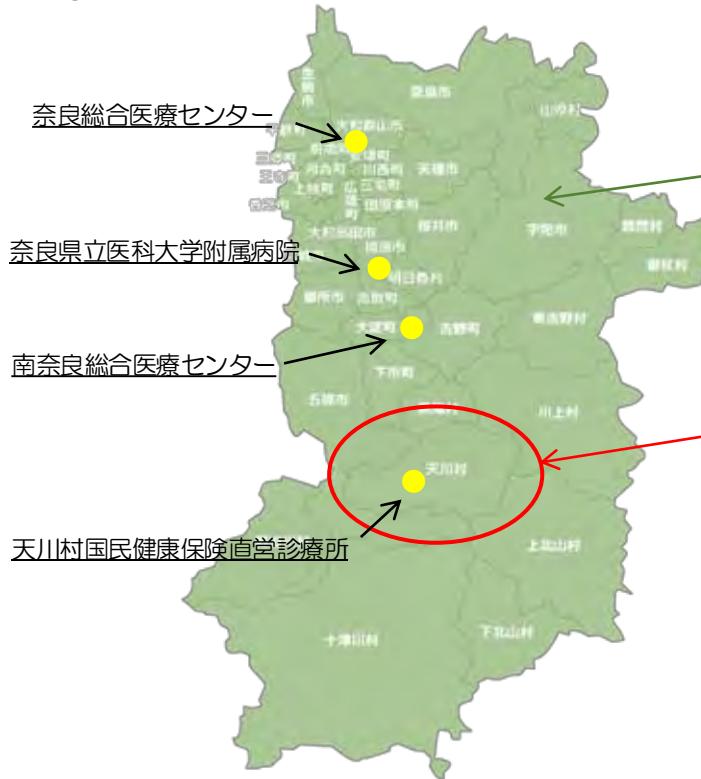


【雪遊び】

積雪量は年によって異なりますが、多い年では30cm～60cm程度積もります。家の周辺で雪遊びをする子どもたちの姿が見られ、白く染まった村の風景は冬ならではの美しさです。スノーパーク洞川で楽しめます。

医療・介護の資源の距離感・制約

(健康サービスへのアクセス)



介護保険サービス等の利用状況【天川村】2023年7月利用分

給付管理人数 : 144人(介護給付141人、予防給付2人、総合事業1人)

介護給付 141人

入所 77人	介護老人福祉施設	35人
	介護老人保健施設	32人
	介護医療院	3人
	特定施設入居者生活介護	6人
	認知症対応型共同生活介護	1人

在宅 64人
(うち村外在住者16人)

訪問介護	28人
訪問リハビリテーション	4人
訪問看護	9人
通所介護	23人
通所リハビリテーション	1人
小規模多機能型居宅介護	10人
福祉用具貸与	23人
短期入所生活介護	7人

予防給付 2人

福祉用具貸与 2人

総合事業 1人

訪問介護 1人

※月の途中で入所したと想定される人については「入所」としてのみカウントし、他のサービスについてはカウントしていない
※「入所」とカウントした人が在宅サービスを利用している場合は、在宅サービス利用者数をカウントしていない
※「特定福祉用具販売」および「居宅療養管理指導」についてはカウントしていない

出展：地域創生Coデザイン研究所

[医師]

- ・へき地支援センターからの2年交代制で地域定着が困難。所長兼任や通勤勤務が多く、地域理解や継続的運営に課題

[看護師]

- ・常勤2名と非常勤で運営し、訪問対応も担う体制。地域在住者の減少により、住民との信頼関係構築が難化

[事務職]

- ・医療現場の実態把握が乏しく、調整力に課題。設備や物品の必要性が伝わりづらく、支援体制が脆弱

[施設・設備]

- ・建物や機器の老朽化が進み、診療環境に制約。夜間・休日対応ができず、観光客や急病対応に限界

[住民・地域]

- ・高齢者中心で受診を遠慮する傾向があり、重症化を招きやすい。日常的な医療職との関係が薄れ、相談しづらさが医療遅延を生む

医療・介護資源の距離感・制約（地形・集落）

急な斜面が多く、集落や住宅は山の地形に沿って形成されている。多くの住宅は吉野建てと呼ばれる段築構造で、斜面を活かして上下に重なるように建てられている。道路は幅が狭く勾配も急なため、日常の移動や生活活動線に負担が生じやすく、高齢者や要配慮者にとっては生活・緊急時対応に特段の配慮が必要な地域となっている。



■地域で気づいた“寄り添う力”的本質（自身のマインドセット）

- ・看護は病院の中だけにとどまらない：地域では、日常の中の関わり一つひとつが看護として大切にされる
- ・「患者」ではなく「一人の住民」として向き合う：精神疾患のある方と接し、見え方や接し方が大きく変わった
- ・白衣がなくても看護は続いている：看護は“する”ものではなく、“ともにある”ことだと実感
- ・安心できる関係づくりが看護の本質：技術だけでなく、「信頼関係」や「寄り添う姿勢」が看護の土台

コミュニケーション In 藤井大和さんは矢田 伸子さん。他の人と ***
一歳です。
2010年12月24日

ごめんなさいです。天川の山野菜です。

天川に移住して2ヶ月が経ちましたが、私は今、認協の介護保険料の相談や第7回介護事業計画の策定業務などをやって頂いておりますが、南会津センター内の診療所や住診室、社協のデイサービスや訪問介護、保健所に日々(今は子供を預けて)で医師を貢献して頂いています。また、乳幼児検診などの保健所業務も担当しています。天川の小学校に参加させてもらったり、老人クラブやサロンなどの地域活動にも積極的に参画しています。

ある日、認協の運営スタッフからカーテル看守中の興味深さの対象さんが1ヶ月間設定で在宅に通るからサポートしてほしいと依頼がありました。

その後、診療所の奥から宅対応するならカーテルの押入れを開けたらエコーコーをみてながら一日一日にこなじひととお話し。診療所で医師がエコーコーをあわながら私がカーテルを押入しました。

ある日、カーテルの押入がオシャレが出てないから対応して欲しいと連絡があり駆けつけました。

結果、カーテルは窓の外で看守を拝んでおられたのでカーテルの交換をすると、オシャッコが出るとともに直感的になりました。事前の準備が役立ちました。

この村民さんは実は実家の患者さんであると聞いて、精神科医療もあり、内halb(いんぱく)で来ないかとか、自ら解らないかと心配しながらお話を聞いていました。

この際の運営スタッフは、ちょっとでもいいからお話を聞きたいとお話を聞いていました。

診療所の奥で医師がカーテルの押入を終えて、私は床の上で村民さんのお腹をメモに記入していると、いきなり自ら腰の奥に手を突き出しながらお話を聞いていました。

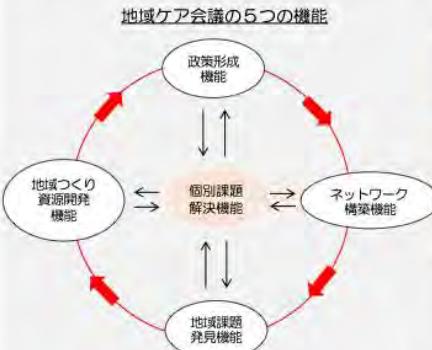
その腰をあるイベントで授業した際に耳に残っておりました。運営の一つとして、病院や訪問看護師などから出でておられる方もいるが、地域おこし協力隊といふ全く違う立場です。

また全く違う立場で当たり前の事ができるようにならうことがなんらか嘘をついたんだと思いまして。この村民さんは2日後に腰に来て行かれましたが、やはり腰の筋肉が弱かったみたいでした。やっぱりお宅が一番弱いところなんですね。今ははるかがバタバタ状態だったと思いますが、今後こういったケースでもお手伝いして暮らしあれられる対づくりをしたいと強く思いました。長文失礼致しました。



■話せる場からはじまる連携の再構築

かつての地域ケア会議は形式的で、課題の本質に迫る議論が不足していました。しかし、資料よりも会話を重視し、生活に近い情報を持ち寄る「話せる場」をつくることで、専門職同士の連携が深まりました。コーヒーを囲んだ自然な対話から、制度に応じるだけでなく、自ら役割を再構成する姿勢が生まれています。会議は今、実践に生きる場へと進化しています。



村内外の医療福祉専門職が集まり、①支援者が困難を感じているケース、②支援が自立を阻害していると考えられるケース、③必要な支援につながっていないケース、④権利擁護が必要なケース、⑤地域課題に関するケース、について議論を深めている

- ・医療・介護を「提供するサービス」ではなく、関係性の中で成立する実践として再定義した
- ・都市部と山間部では、支援の前提条件（時間・距離・関係性）が本質的に異なることを明確に認識した
- ・地域特性を踏まえ、都市前提の効率モデルをそのまま適用しない判断を行った

■“当たり前”を見直す支援づくり

地域ケア会議では、「寝たきり=往診」という従来の当たり前を見直し、多職種で話し合うことで、その人の希望に沿った柔軟な支援へとサービスを組み替える取り組みが進んでいます。専門職同士が同じ立場で関わることで相互理解が深まり、本人にとって最適な支援を共に考える関係性が築かれていくます。

多職種連携で離床を進めている様子



15

- ・行政計画の策定に関与することで、医療中心の思考を一度リセットし、生活起点で再構築した
- ・雑談・立ち話・寄り道といった日常的関わりを、支援の前段階として構造的に位置づけ直した
- ・制度に現場を合わせるのではなく、現場の実態を制度へ翻訳する実装プロセスを積み重ねた

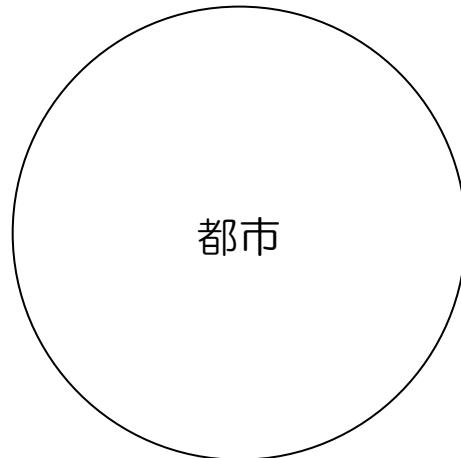
都会と田舎の価値観の違いが、医療・介護のあり方にどう影響するか

病院看護師が地域の暮らしや生活課題を直接理解する機会を持つことは、退院後の生活を見据えた意思決定支援やACP支援の質を高める上で重要である。

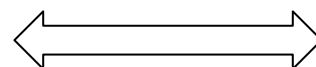
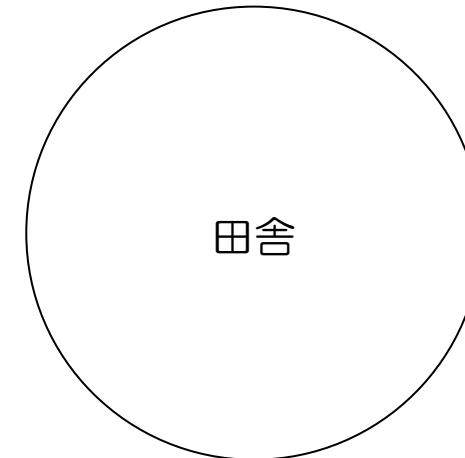
特にへき地では、在宅医療・介護の実情を院内から把握することが難しく、地域での実体験が生活に即した判断を支える有効な知見となる。

病院内の支援体制整備に加え、生活視点を備えた看護師を育成することは、ケアの質向上と病床稼働の安定、看護師の働きがい向上にも寄与する。

制度的ケアを支える「量と速度」の価値



文化的ケアを支える「関係と持続」の価値



医療・介護における「効率」

- 特徴：限られた人員・時間・資源を最大限活用し、多くの対象に対応
- 実例：外来や入院での短時間診療・処置

ICT・記録システムによる業務の自動化

標準化されたケアマニュアル・ルーチン化

- 利点：安全性・均一性・再現性の確保

- 課題：関係性・個別性の希薄化、継続的ケアの難しさ

医療・介護における「非効率」

- 特徴：時間や手間を惜しまず、関係性・信頼を重視したケアを行う
- 実例：訪問時の会話・寄り道・雑談

計画外の見守りや住民同士の支え合い

医療者が患者の生活背景を理解するための“余白の時間”

- 利点：信頼構築・早期発見・地域の安心感の醸成

- 課題：制度上の評価が難しく、業務効率としては見えにくい

林業×医療・観光×福祉の越境実践

■他分野連携：森と活きる天川村ワークショップ（林業×医療・福祉）

山仕事をしている林業労働者と医療機関で活躍している救急認定看護師が講師となり、労働災害を減らす取組みを現場のスタッフで意見交換した。お互いの課題を共有し、どのような対策ができるのかを考えたり応急手当の技術の共有などができた。

CommunityNurseCompany
2月17日 17:40
開催レポート | 森と活きる天川村ワークショップ

コミュニティナースプロジェクト3期修了生の山縣 駿 (Satoshi Yamahata) さんが活動する、奈良県吉野郡天川村で2/16（日）「森と活きる天川村ワークショップ」が開催され、奥大和コミュニティナース養成講座修了生の榎田さん（五條市）と吉田さん（大淀町）も駆けつけました！

【林業×医療・福祉】
第一回目は、林業労働者と看護師が集まり、労働災害を減らすための議論を重ねました。
お互いを知ることに活発な意見交換が行われ、実りのあるワークショップになりました。
お忙しい中ご参加いただいた、林業側のみなさま、救急認定看護師やコミュニティナースのみなさま、本当にありがとうございました。
次回も有意義な開催にしたいと思いますので、どうぞよろしくお贈り致します。



天川村にて、観光×福祉・看護の越境実践を開始

- 看護職が観光現場に入り、地域課題（人材不足・空き家・つながりの希薄化）を把握・理解
- 健康支援の専門性を活かし、「宵々天川」の企画・運営を住民と共に実施
- 暮らし・観光・福祉をつなぐ“共創の場”を創出し、多世代・多分野の交流を促進

天川村にて、林業×医療・福祉の越境研修を実施

- 救急認定看護師が講師となり、応急対応技術を共有
- 労働災害対策を現場起点で議論・体験

現在は大学生インターンとも連携

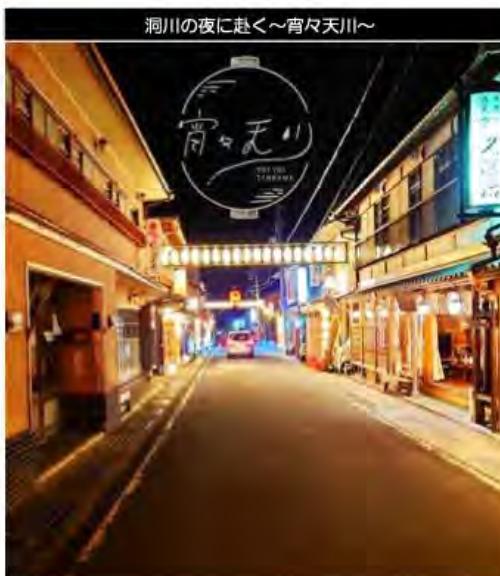
- 林業の歴史や課題を伝え、現地見学・体験を通じて学ぶ

- 学生の専門性を地域課題に応用する視点を育成

次年度以降、森林環境譲与税を活用し教育体制を制度化を予定

■他分野連携（宵々天川の立ち上げ）

観光地として知られる天川村・洞川温泉は、修験道発祥の地である大峯山（山上ヶ岳）へ参詣する行者さんたちをおもてなしする場として始まり、いまなお修験山伏が訪れる信仰の土地です。自然信仰のよりどころとして、1300年の長きにわたり訪れる人の心に寄り添ってきたこの地で、まずはライトアップイベントから始めます。



西友チャレンジキッチン

観光シーズンの日中は、カフェ利用でもにぎわう「シェアオフィス西友」。宵々天川では店内に無数の提灯が広がり、これまでとは違った街並みで夕方以降も営業いたします。チャレンジキッチンとして、いろいろなお店がかかるがわるい営業し、提灯の下、特別な夜をお楽しみください。

教育・実践・ナイチングール精神

■ナイチングーリッシュな社会活動を学びのコンセプトに

ナイチングールのように、人の暮らしや社会・自然の構造のことを本質的に理解したうえで、『社会システムの転換を志向し、リーダーシップをもって共創をリードできる人材』を生む

- ・都市生活ではできない、ゆとりのある時間の中での人と人の関わり（暮らし・福祉・看護等）の経験
- ・管理された自然ではない、相互に関わり合う野生の自然との関わりの経験
- ・みずからに向き合い、自分や他者のことを知る経験

みらいの社会・暮らしの実践に関する世界トップレベルの理論や実践知を獲得できる座学と暮らし・自然の中での身体的な経験を習得できる実践学を両輪で学べるプログラム

- ・最新の事例や課題意識、それに対する実践の知識を得る
- ・学んだことをゼロからやってみて、失敗することができる
- ・リビングラボのプロセスを通じて、人として生きること、暮らしを営むこと、社会をつくることを学び、共創をリードできる



実像のナ
リビングラボ
奈良県天川村
出展：日本リビングラボ

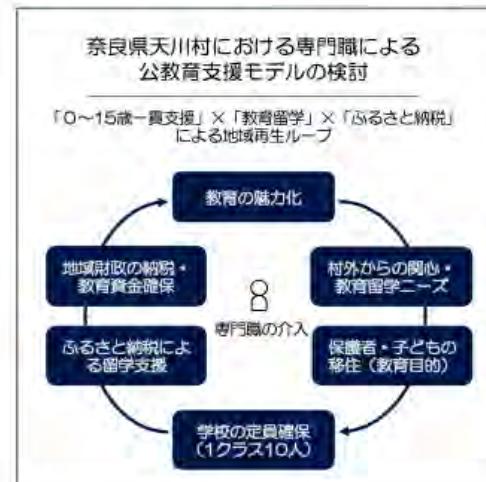
天川村にて、ナイチングール精神に基づく実践教育を展開

- ・自然・暮らし・社会の本質的な関係性を現地で体験的に学ぶ
- ・制度の枠を超えた共創のプロセスを通じ、挑戦と失敗を許容する風土で学ぶ
- ・理論と実践を往復し、地域発のリーダーシップを育成

■変化の時代に応じた教育の再構築

このままいいのか？一天川村の教育課題を見つめ直す

奈良県天川村では、急速な人口減少と少人数学級（出生率0%）により、教育環境にも深刻な課題が生じています。1クラス3人～10人という極端な少人数学級では、子どもたちが協働的に学ぶ機会が限られ、社会性の育成にも影響を及ぼしています（一方で同級生が兄弟のような関係性）。さらに、高校未設置という地域構造により、15歳で村外へ進学・移住せざるを得ず、地元とのつながりが途切れるという課題もあります。加えて、発達支援が不足しており、特性のある子どもへの早期対応が十分に行われていない現状があります。保健・福祉・教育部門の連携不全により、乳幼児健診から学校生活、就労支援まで一貫した支援が途切れがちです。さらに、外国にルーツを持つ子どもたちに対する教育的受け入れや支援体制が未整備で、多文化共生への対応も急務となっています（村ではALTが2年に1回交代制）。



〔期待される成果〕

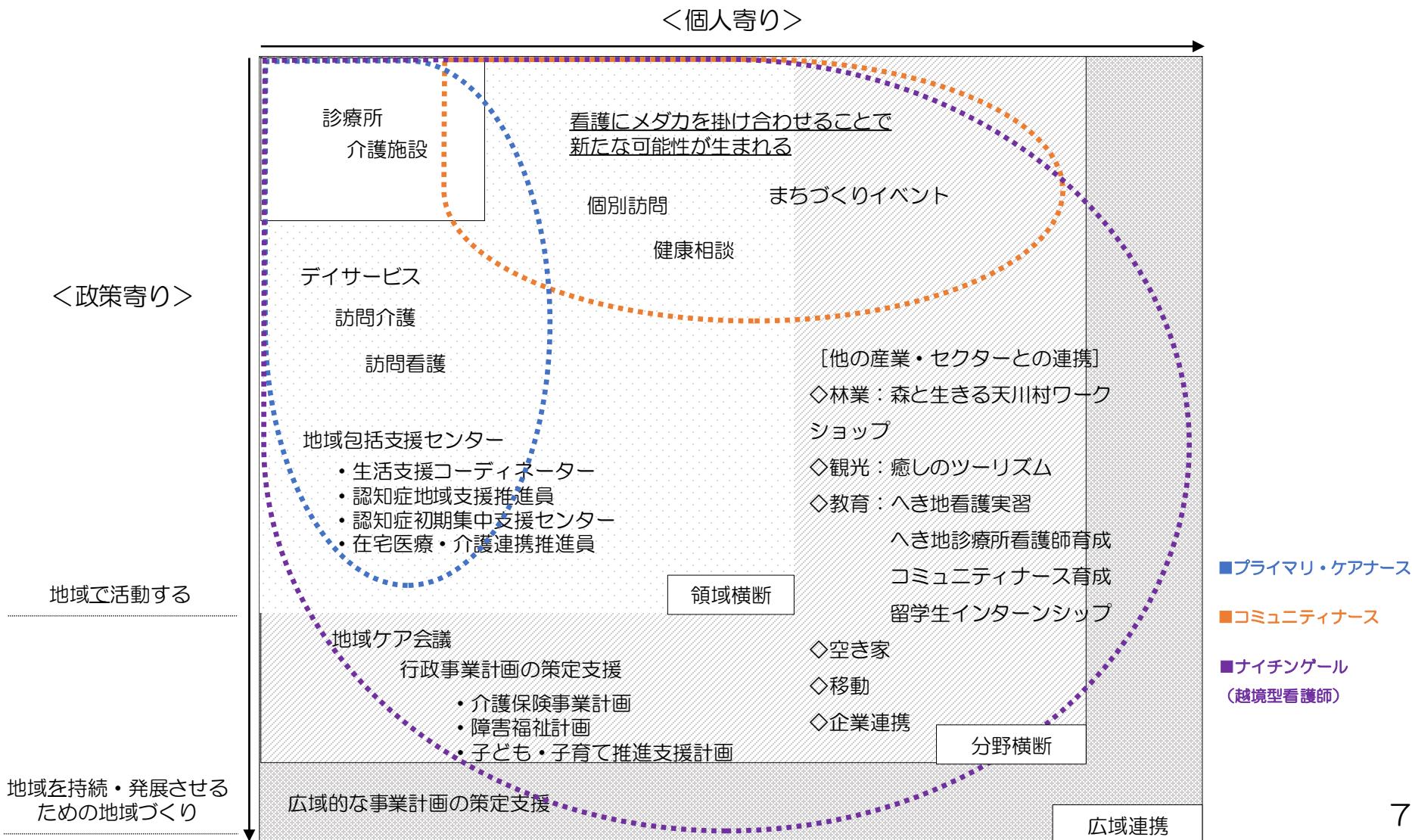
- 1.多機関連携によるべき地支援モデルの理論的枠組みの構築
- 2.グレーゾーン・境界型児童に対する効果的支援方法の整理
- 3.一貫した支援体制の中で診断依存からの脱却モデルの提示
- 4.保護者の理解促進および早期介入の効果に関する知見
- 5.教育魅力化による1クラス10人規模の維持と学びの質向上
- 6.教育移住にかかる費用をふるさと納税で補助する財政支援モデルの構築
- 7.リハビリが管理するマイクロジョブ就労支援の実現性と効果
- 8.教育委員会と福祉課を横断する連携モデルの具体化
- 9.発達段階に応じた支援が就労までつながるライフステージ型支援体系の提示
- 10.留学生インターンによる国際交流と子どもの異文化感受性向上の効果の実証、および外国ルーツ児童の教育支援に資する仕組みの提案

天川村にて、教育を軸とした地域包括支援を展開

- ・人口減少・少人数学級に対応し、乳幼児健診～就学までの一貫支援体制を整備
- ・専門職が伴走支援を行い、子どもの村外転出リスクを低減
- ・多文化共生や留学生との交流を通じ、教育を地域資源として移住促進へ展開

社会活動の広がり（ナースの越境が地域を変える）

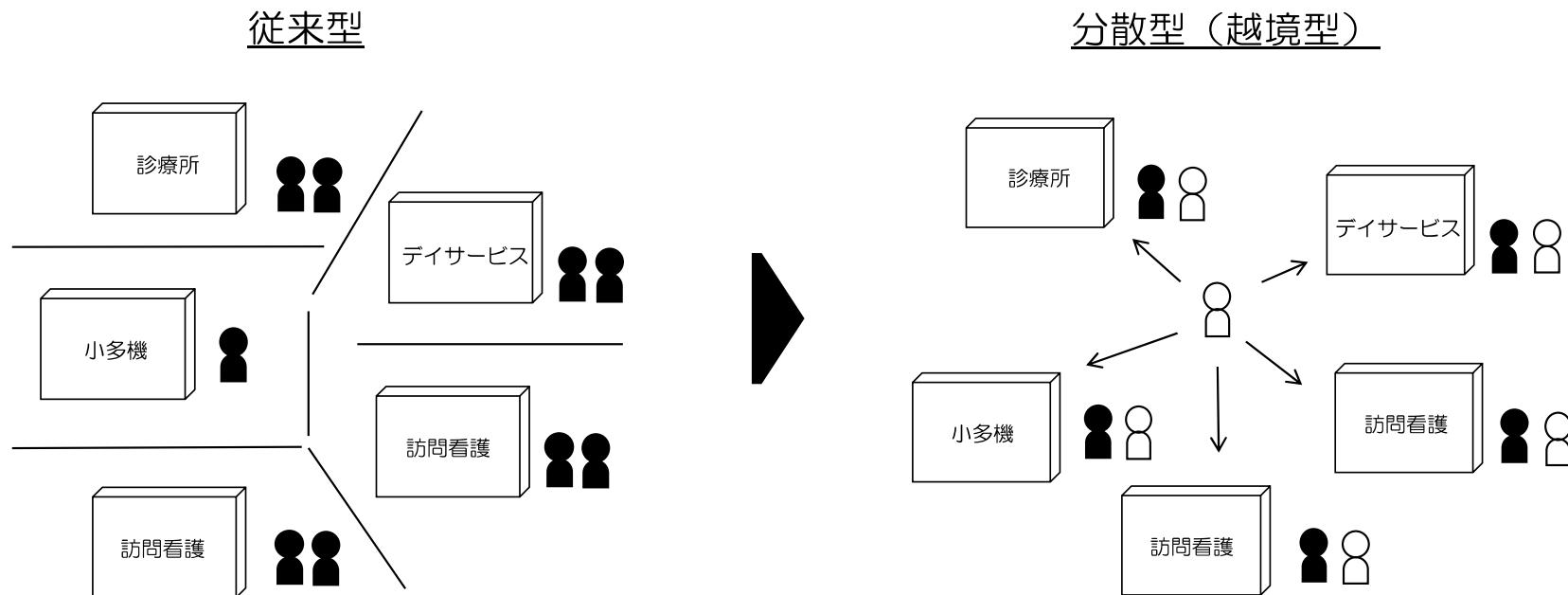
活動を個人と政策の二軸で整理すると、診療所や介護施設からはじめり、地域で活動する訪問看護や地域包括は政策寄り。一方で、看護に好きや得意を活かした地域活動は個人寄りの活動。また、医療や介護で閉じる看護ではなく、地域の持続を考えた活動や分野を超えた活動などを展開している。



新たな看護師の位置付け（越境型看護師）

各事業所へ看護人材を配置するといった従来の働き方だと、村においては、限りある人材を取り合ったり、事業所同士の縦割りが生まれてしまう。また、看護師の配置基準が満たされている事業所は、二人目を雇用する余裕はなく、一人あたりの負担が大きくなる。

そこで、天川村では一人が複数の役割を担うといった分散型を進めている。領域を横断的することで、さまざまな視点で支援に必要な情報を捉えることができ、かつ事業所間の連携がとりやすくなるといった効果が期待できる。



奈良県版看護人材配置の新モデル（案）

奈良県の主要な医療機関において、看護師に焦点を当てた人員配置体制を整備し、個々の能力向上に必要な配置を実現することを進める。そのうえで最終的には、分野を超えて活躍できる新たな看護師のキャリアのあり方を構築し、人材を地域全体でシェアしながら、必要な場所へ適切に配置できる地域包括ケアシステムを目指す。あわせて、1人が複数の役割を担う新たなキャリア設定を導入し、限られた人材でも持続可能な支援体制を形成していく。

